

令和5年3月9日

令和4年度 第4回パラスポーツ推進 プロジェクト実行委員会 報告資料

○事業報告

- 1 本県の障害者のスポーツ活動における課題・・・P 1
- 2 事業の全体像・・・・・・・・・・・・・・・・・・P 1
- 3 事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・P 3
- 4 事業の評価・成果及び課題・・・・・・・・・・P 15
- 5 来年度の事業方針・・・・・・・・・・・・・・・・P 17

1 本県の障害者のスポーツ活動における課題

本県は、山梨県スポーツ推進計画において「一人一スポーツ」の推進を掲げ、県民のスポーツ実施率の向上に取り組んでいる。また、障害者のスポーツ活動の推進について、障害者がスポーツを通じて社会参加できるように環境の整備や支援を行うこととしている。

本県の現状として、特別支援学校及び特別支援学級在籍者の合計数は増加しているものの、県障害者スポーツ大会の参加者数は減少傾向にあり、卒業後の余暇活動としてスポーツ活動に繋がりにくい現状が推察される。障害者の多様なニーズに対応するための連携・協働体制の構築は希薄であり、障害者が身近な地域でスポーツを「はじめる」「続ける」ための参加機会、活動拠点、指導者及び情報発信力の不足等、複数の課題が浮き彫りとなっていた。

これらの課題を解消するため、福祉・教育・競技団体等との連携を中核的に担うコーディネーターを配置し、地域でスポーツに親しめる機会を創出するための「関係づくり」「人づくり」「拠点づくり」により、誰もが身近な場所でスポーツに参加可能な社会の実現に向けた環境整備を推し進めることとした。

2 事業の全体像

(1) 目指す姿

「関係づくり」「人づくり」「拠点づくり」による、誰もが身近な場所でスポーツに参加可能な社会の実現

(2) 実施内容

①関係づくり

ア 関係団体との連携を中核的に担うコーディネーターの配置

(再委託先の県障害者福祉協会へパラスポーツコーディネーター2名を配置)

イ 「パラスポーツ推進プロジェクト実行委員会」の設置・運営

ウ パラスポーツに関する各種相談に対応するための窓口設置

②人づくり

ア パラアスリート等による、パラスポーツ普及のための講演会等の企画・運営

イ 障害の有無に関わらず、誰もが参加できるパラスポーツフェスティバルの開催

③拠点づくり

ア 特別支援学校等の体育施設を活用したスポーツ交流教室の開催

イ 4圏域のスポーツクラブ等の関係団体と連携に向けた調整・実践

(3) 事業実施体制

事業実施にあたっては、障害者スポーツの普及促進と関係者のネットワーク強化を図るため、県内の様々な分野からなる官民学が一体となった組織である「パラスポーツ推進プロジェクト実行委員会」を設置し、事業の進捗管理、成果の検証及び今後の方策について意見交換を行った。

①委員名簿

(分野別氏名 50 音順)

分野	所属・役職名	氏名
福祉	(福) 山梨県障害者福祉協会 理事長	竹内 正直
	山梨県ボランティア・NPO センター センター長	土屋 茂
障害者スポーツ	山梨県障害者スポーツ協会 事務局長	上野 直樹
	山梨県ボッチャ協会 副会長	田中 千晶
	山梨県障がい者スポーツ指導員協議会 副会長	清水 毅
スポーツ	(公財) 山梨県スポーツ協会 専務理事	井出 仁
	山梨県スポーツ推進委員協議会 副会長	小笠原 利広
企業	(株) ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ 競技・運営部 副部長	長田 圭介
教育	山梨学院大学スポーツ科学部スポーツ科学科 教授	谷口 裕美子
	特別支援学校体育連盟 会長	柳澤 縁
行政	県教育委員会保健体育課 課長	金井 哲也
	県教育委員会特別支援教育・児童生徒支援課 課長	鷹野 美香
	県福祉保健部障害福祉課 課長	山本 英治
	県スポーツ振興局スポーツ振興課 課長	渡辺 一秀

②開催実績

	日程	主な協議事項
第1回	令和4年6月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者スポーツ施策の現状と課題 ・パラスポーツコーディネーター配置事業の概要
第2回	令和4年9月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・関係団体との連携状況 ・パラスポーツフェスティバルの概要
第3回	令和4年12月16日 (書面開催)	<ul style="list-style-type: none"> ・関係団体との連携状況 ・パラスポーツフェスティバルの実施報告
第4回	令和5年3月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の事業報告 ・今後の取組について

・第1回



・第2回



3 事業内容

(1) パラスポーツに関する各種相談に対応するための窓口設置

障害者本人や支援者、スポーツ団体等からの相談に対応する窓口を設置し、相談内容に応じてスポーツクラブ、競技団体への受け入れ調整や、初回参加時の同行など、障害者のスポーツ活動が円滑に行われるようコーディネート業務を行った。

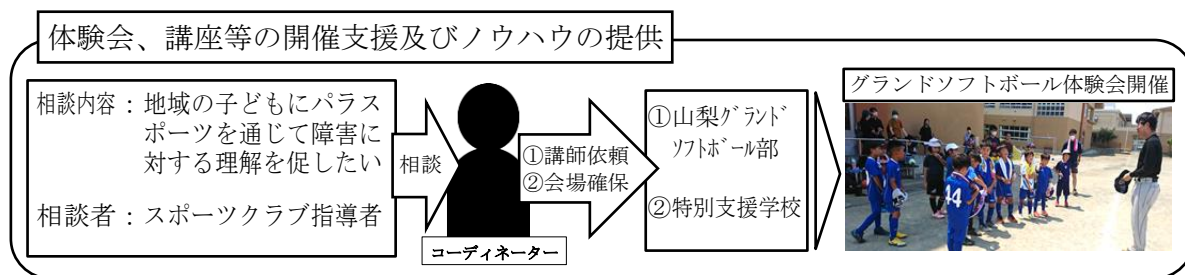
①事業実績

年間（6月～3月）相談件数・・・20件

ア 相談内容内訳

- ・体験会、講座等の開催支援及びノウハウの提供…4件
- ・活動場所等の情報提供及び橋渡し…9件
- ・指導者の派遣 …5件
- ・用具の貸し出し…2件

イ 相談事例（対応例）



②成果及び課題

- 相談件数はまだ少ないが、周知が進むことで今後、コロナの安定化により問い合わせが多くなる兆しが見えた。
 - 社会福祉協議会での交流事業について、在住する障害者スポーツ指導員を紹介し、以後のボッチャの指導に対応することができた。
 - 交流会実施によりパラスポーツを体験してもらうことができ、参加者から喜びの声が聞かれた。（障害のない方には、障害者と一緒に活動することで、障害者への認識の変化を感じてもらえた。）
 - 各特別支援学校からは管理職等の理解・協力が得られ、交流教室を実施する（予定を含む）ことができた。
- ▲相談窓口について、より多くの方に知っていただくようにする必要がある。

(2) パラアスリート等による、パラスポーツ普及のための講演会等の企画・運営

本県ゆかりのパラアスリートによる講演を通じて障害への理解やパラスポーツの普及を推進するとともに、障害者の社会参加の促進及び共生社会の実現へ繋げるため、講演会を行った。

①第1回パラアスリート講演会

テーマ	『出会い』～パラスポーツがくれた、大切な人との繋がり～
講師	・五味 翔太 氏 (第5回日本 ID ハーフマラソン選手権優勝) ・小澤 政幸 氏 (山梨グランドソフトボール部 主将)
実施日時	令和4年9月29日(木) 13時30分～15時
実施場所	小瀬スポーツ公園武道館 会議室
参加者	20人
参加者からの主なコメント	
<ul style="list-style-type: none"> ・社会をよくするヒントが沢山ありました。もっともっと多くの人を知ることによって「障がい」という事を理解し、実は「障がい」のある方だけではなく、「障がい」というものを作り出してしまっている事に気づかないといけないと感じる。そのために「<u>まず知る事</u>」に重きを置いて活動することが必要だと再認識しました。 ・五味さんの努力に感激しました。「どんな事があってもあきらめない」の言葉が印象に残りました。小澤さんのお話にも興味深く聴くことが出来ました。今後のご活躍お祈りいたします。グランドソフトボールを初めて知ることが出来うれしく思いました。 ・お二人のお人柄から、また、お話しぶりから全く、障害をお持ちの方とは思えない講演会であったように思われた。経験に基づく、講演内容だったと思いますが、とても身近に感じ、又、こういった機会を設けていただければと思います。 ・「障害があっても頑張っている姿を見てほしくて講演を決意した」と言っていたが、考え方が素晴らしいです。講演でもしっかりと自分のやりたい事、自分ひとりでは出来ない。皆さんののおかげでここまで出来た事をしっかりと言っていました。とにかく精神的に素晴らしい、今後の五味君が楽しみです。 	
チラシ及び当日の様子	

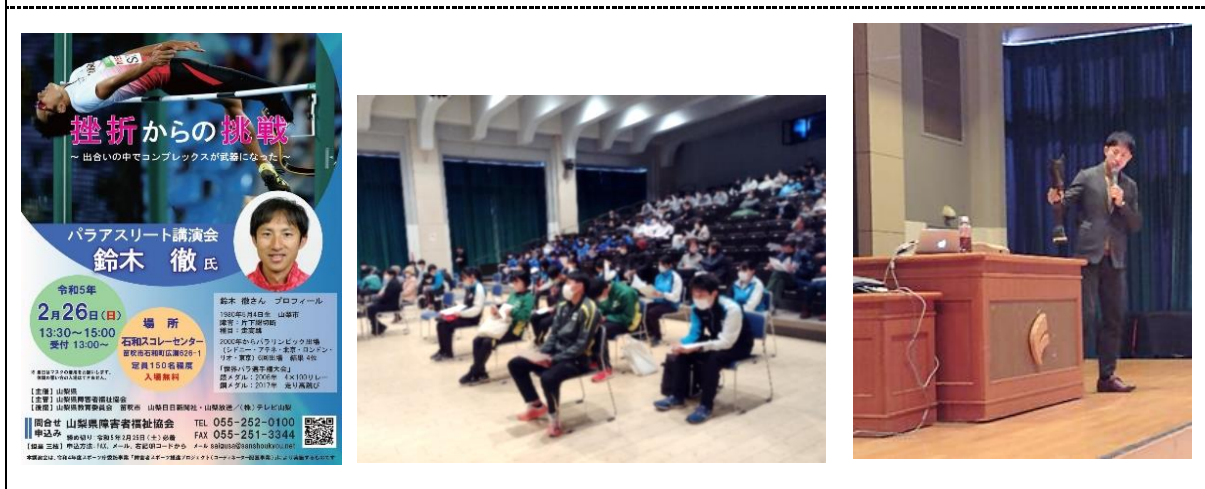
②第2回パラアスリート講演会

テーマ	挫折からの挑戦 ～出会いの中でコンプレックスが武器になった～
講師	鈴木 徹 氏 (パラリンピック6大会連続入賞)
実施日時	令和5年2月26日(日) 13時30分～15時
実施場所	笛吹市スコレーセンター 集会室
参加者	117人

参加者からの主なコメント

- 映像で義足の凄さをわかりやすく説明してくれて興味が持てました。これからパラスポーツ観戦や体験をしたいと思いました。知らない事がたくさんあり、聞くことができ良かった。
- 自分とは違う境遇で生きている方の話が聞けたのは、これからの自分の価値観につながる機会だと思う。小中高等学校での講演があったらいいと思う。多様性の社会で生きていく人達にパラスポーツに対する興味が高まってくると思う
- 人間の威力を感じることができた。コンプレックスがある事が武器になり精神面で強くなれる。コンプレックスとうまく付き合い考えることが成功につながると分かった。
- 将来医療従事者を目指すものですが、様々な症状を抱えた方々のサポートをする中で、バリアフリーの考え方は大切になってくると思う、話を聞いて「障害の邪魔」になることもあるのだと気づきました。
- 陸上だけでなく人生に勇気と精神力の強さを感じ、生活面での考え方ひとつで変わることを知って良かった。
- 貴重な経験談だったので、更に多くの参加者に聴いて欲しいと思いました。周知方法の検討をして頂けると良かったかなと思う。(学生にはとてもインパクトのある講演だと思う)

チラシ及び当日の様子



③成果及び課題

- 第1回、第2回の講演会共に、当日の様子が県内ニュースで放送され、一般県民に対するパラスポーツへの理解が一層進んだと思われる。
- 障害のある方ない方を含めて、10代から70代まで幅広い年代から参加していただくことができた。
- 参加者に対して、まずは障害を理解することへの気付きを与え、パラスポーツの観戦や体験への動機付けをすることができた。
- 講演会の聴講者から相談を受け、別途講演会に講師を紹介した他、講師が中心となったパラスポーツの体験会の開催に繋げるなど、二次的に波及する形で新しい連携を生み出す事業効果が確認された。(下図参照)
- ▲参加対象者が興味・関心を持てるようなテーマ設定をするなど、誰に対して何を伝えるかを具体的に検討する必要がある。


事業の二次的な波及効果

会場で講演を聴いていた県ボランティア協会の関係者から、ボランティア協会主催でパラスリートの講演会を開催したいとの相談があった。

コーディネーターを通じて2名のパラスリートを紹介し、11月20日の講演会開催を支援。

紹介したパラスリート


- ・五味 翔太氏
(9/29講演会講師)
- ・田中 千晶氏
(県ボッチャ協会副会長)



講演で五味翔太さんが「陸上教室を開きたい」と語ったところ、障害児の保護者から「ぜひ参加したい」との声が多く届いた。

五味さんから陸上教室の開催についてコーディネーターへ相談

12月11日に五味さんを講師とした陸上教室を開催することとし、コーディネーターが会場確保とプログラム作成を支援した。陸上教室の様子は山梨日日新聞に掲載された。今後は県内のボランティア団体や社会福祉法人などと連携し、県主催の交流教室として継続的に開催していく予定。



山梨日日新聞 令和5年1月15日(日)社会 / 紙面頁027

(3) 障害の有無に関わらず、誰もが参加できるパラスポーツフェスティバルの開催

障害やパラスポーツへの理解を深めるとともに、障害のある方の社会参加の促進及び共生社会の実現へ繋げるため、障害がある方ない方を対象としたパラスポーツの体験会を開催した。

①事業概要

日 時	令和4年11月6日（日） 午前9時から正午まで		
場 所	山梨県立青少年センター		
参 加 者	167人（事前申込）		
連携団体	山梨県ボッチャ協会・山梨ペンギンズ・山梨ブラインドサッカークラブ・山梨サウンドテーブルテニスクラブ・山梨県障害者フライングディスク協会・山梨県障がい者スポーツ指導員協議会・山梨学院大学・山梨県障害者福祉ふれあい会議・山梨県ボランティアNPOセンター		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・パラスポーツ7種目の体験 (ブラインドサッカー、フライングディスク、サウンドテーブルテニス、車いすバスケットボール、車いすスラローム、ボッチャ、カローリング) ・障害福祉施設による物品販売 ・パラスポーツ用具の展示 		
行 程	9:00	○受付	正面受付
	9:20	○開会式 次第 ・県あいさつ ・協力団体紹介 ・諸連絡 ・準備体操	グラウンド
	9:30	○体験会 ・車いすバスケットボール ・カローリング ・サウンドテーブルテニス ・ボッチャ	体育館
		・ブラインドサッカー ・フライングディスク ・車いすスラローム	グラウンド
		・パラスポーツ用具の展示コーナー	音楽室
・障害福祉施設による販売コーナー (雑貨、農作物)		連絡通路	

活動の様子

・開会式



・ブラインドサッカー



・フライングディスク



・サウンドテーブルテニス



・車いすバスケットボール



・車いすスラローム



・ボッチャ



・カローリング



・障害福祉施設による販売



②成果及び課題

- 障害のある方が参加できるスポーツイベントがほとんどなかった本県において、パラスポーツの総合型体験イベント開催は初の試みとなった。
- 当日の様子はNHKの県内ニュースで紹介されたことから、一般県民に対してもパラスポーツへの一定の理解が進んだと思われる。
- 当日は167人の参加者が共にパラスポーツを体験し、障害の有無に関わらずスポーツを楽しむ姿が見られたことは、誰もが身近な地域でスポーツに参加できる環境づくりに向けた大きな契機となった。
- 「フェスティバルの満足度」(参加者アンケート)は、回答した参加者の内76%が「すごく楽しかった」と回答しており、「まあまあ楽しかった」と回答した23%と合計すると、99%の参加者がパラスポーツを楽しめたという結果となった。障害の有無に関係なく、誰もが一緒に楽しむことができるというパラスポーツの魅力が、イベント全体の満足度向上に繋がっていることが考察される。
- パラスポーツ種目の認知度について、「今回はじめて知った種目は何ですか」(参加者アンケート)の問いに対して、パラリンピック種目であるボッチャ、車いすバスケット、ブラインドサッカーは認知度が高い一方で、サウンドテーブルテニス、車いすスラローム、カローリング等、あまり知られていないパラスポーツが複数種目あることが分かった。
- 競技団体が体験ブースを運営することにより、多くの参加者に競技について知ってもらうことができ、くり返し取り組むことにより、特に認知度の低いパラスポーツの競技団体にとっては認知度の向上に繋がることが期待される。
- ▲単発での開催では、一過性の効果に終わってしまうことから、来年度以降の継続を見据えた事業計画が必要である。パラスポーツを通じた障害の理解向上と、共生社会の実現に寄与するフェスティバルへと持続的に発展していくことが期待される。

(4) 特別支援学校等の体育施設を活用したスポーツ交流教室の開催

本県は令和2年度から「スポーツ交流教室」を実施し、障害の有無に関係なく地域の住民がパラスポーツを通じて交流や理解を深めるための活動を行っている。

しかし、委託先の県障害者スポーツ協会の独力では情報発信力に課題があり、地域住民への周知や参加者数の確保に課題があった。

そこで、コーディネーター配置事業を活用し、身近な地域の拠点として県内4圏域毎に指定したモデル校を中心に、関係団体と連携してスポーツ交流教室を実施することで情報発信力不足を解消し、地域における新たなパラスポーツ活動の機会創出を図った。

①事業実績

- ・実施回数 34回
- ・参加者数 791人

■ コーディネーターがメイン担当として関わったスポーツ交流教室 (21回、443人)

□ 障害者福祉協会が開催したスポーツ交流教室 (13回、348人)

	日程	場所	内容	障害者	一般
1	5月8日	国母工業団地	グランドソフトボール	15	14
2	6月18日	県立高等支援学校桃花台学園	サッカー	21	6
3	7月2日	県立盲学校	ブラインド体験	4	36
4	7月3日	甲府市立里垣小学校	ボッチャ・フライングディスク		3
5	7月3日	県立盲学校	ボッチャ		15
6	7月9日	県立わかば支援学校	ボッチャ・フライングディスク	7	8
7	7月24日	山梨県福祉プラザ	ボッチャ	7	10
8	9月1日	上野原市もみじホール	ボッチャ	26	5
9	9月3日	県立高等支援学校桃花台学園	ボッチャ	3	10
10	9月4日	山梨県福祉プラザ	ボッチャ	6	10
11	9月9日	山梨市総合体育館	ボッチャ	3	7
12	9月11日	県立盲学校	グランドソフトボールクラブ		11
13	9月13日	北杜市須玉総合体育館	ボッチャ・フライングディスク	4	15
14	9月17日	県立盲学校	ボッチャ・フライングディスク		30
15	9月23日	県立盲学校	ボッチャ・フライングディスク	7	5
16	10月19日	ボランティア・NPOセンター	サウンドテーブルテニス	8	7
17	11月4日	甲府駅よっちゃばれひろば	ボッチャ		72
18	11月12日	県立わかば支援学校	ボッチャ	5	7
19	11月22日	甲西健康福祉センター	ボッチャ		16
20	11月23日	県立盲学校	ボッチャ・ゴールボール		46
21	11月26日	県立高等支援学校桃花台学園	ボッチャ		3
22	11月27日	フィッツスポーツクラブ青葉	ボッチャ	8	8
23	11月29日	石原なち子記念体育館	ボッチャ	12	2

24	12月2日	北杜市大泉体育館	ボッチャ	4	25
25	12月6日	身延町福祉センター	ボッチャ	2	10
26	12月9日	身延小学校	ブラインド体験		24
27	12月11日	小瀬スポーツ公園	走り方教室	3	11
28	12月11日	青葉インドアテニススクール	車いすテニス	3	6
29	12月14日	北杜市立小淵沢小学校	ボッチャ	1	42
30	1月6日	県立かえで支援学校	ボッチャ・フライングディスク	9	4
31	1月21日	県立盲学校	走り方教室・ボッチャ教室	4	13
32	2月4日	県立甲府支援学校	ボッチャ	36	6
33	2月4日	甲府市総合市民会館	ボッチャ・カローリング	7	73
34	3月5日	甲府市勤労者福祉サービスセンター	走り方教室・ボッチャ教室	7	19
35	3月11日 (予定)	小瀬スポーツ公園芝生広場	パラスポーツ体験		
36	3月25日 (予定)	県立わかば支援学校	ボッチャ・フライングディスク		

②コーディネーターが関わった事業事例

テーマ	ボッチャ・ゴールボール体験
実施日時	令和4年11月23日(水)
参加者	甲府市池田地区在住幼児及び児童約46人
会場	県立盲学校体育館
体験の様子	 <ul style="list-style-type: none"> ・小学生高学年生に事前にボッチャのルールの説明・注意点を確認したうえで競技の運営にあたってもらった。高学年生は幼児にルール教えながら体験を進めてくれる様子が見られた。 ・ゴールボールは競技に慣れてもらうため、軽量のブラインドサッカーボールを用いて練習することで、安全に活動できた。後半は公式球による試合形式を行い、多くの児童が積極的に体験を楽しんでいた。

③成果及び課題

- 特別支援学校の学校長の理解を得る中で、圏域毎のモデル校を指定した。
- コーディネーターがメイン担当として関わった事業として、計21回のスポーツ交流教室を開催し、参加者増加を図った。
- スポーツ交流教室の参加者合計は791人であり。昨年度のスポーツ交流教室の参加者合計517人と比べ、参加者の増加を図ることができた。
- 特別支援学校在籍生徒が日常的に利用している地域の施設でも交流教室を実施し、パラスポーツの周知ができた。
- 山梨グランドソフトボールクラブや、県ボッチャ協会などのパラスポーツ競技団体と連携してスポーツ交流教室を実施することができた。
- ▲各モデル校に協力してもらい家庭にチラシを配布したが、コロナ禍の影響で、1回あたりの参加人数が少なかった。
- ▲より多くの方に周知し、参加者増加を図るため、スポーツ交流教室の開催予定を新聞のイベント情報などを活用することや、放課後等デイサービスなどの施設にチラシを配布するなどの方策を検討する必要がある。
- ▲県内のパラスポーツ競技団体との連携体制を更に強化し、様々なパラスポーツ種目でスポーツ交流教室が実施できるよう取組を進める必要がある。

(5) 4 圏域のスポーツクラブ等の関係団体と連携に向けた調整、実践

地域スポーツの場における障害者を対象としたスポーツ提供体制を把握し、調査結果から導き出された現状や課題等を今後の取組への反映させるため、県内の総合型地域スポーツクラブ（以下：クラブ）を対象としたアンケート調査を実施した。

①調査期間

令和4年8月19日～9月9日

②調査対象

県内に設置されているクラブ全32団体

③回収状況

回答があったクラブ数：12（回収率：37.5%）

④調査内容

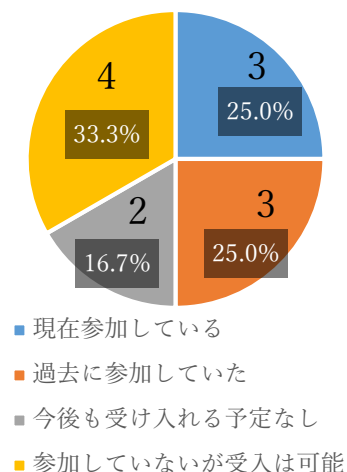
- ・クラブ活動への障害者の参加状況について
- ・障害者が活動に参加する際の配慮の有無について
- ・障害者を受け入れできなかった又は、受け入れ予定がない理由について
- ・障害者も参加可能なスポーツ体験会等の企画に対する希望の有無について

⑤アンケート調査の集計

問1 クラブ活動への障害者の参加状況について

○回答があったクラブのうち、25%に障害者が参加

- ・障害者の参加状況は、「現在参加している」クラブが3つであった。
- ・回答があったクラブのうち、「現在参加している」、「過去に参加していた」、「参加していないが受入は可能」のクラブを合計すると10となり、全体の8割に達することから、障害者の参加自体は可能であるクラブが多数となる。



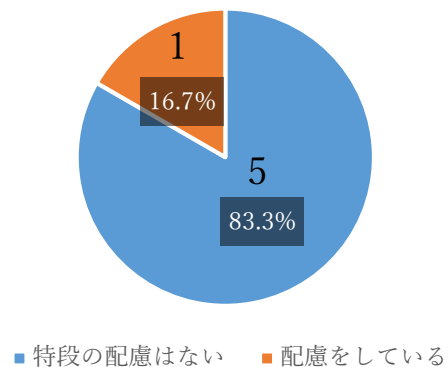
問2 障害者が活動に参加する際の配慮の有無について

○特段の配慮はせずに、一般のプログラムに参加できる障害者が参加する傾向

- ・障害者が「現在参加している」「過去に参加していた」6クラブのうち、「障害者が活動に参加する際の特段の配慮※をしていない」が5クラブであった。

※特段の配慮

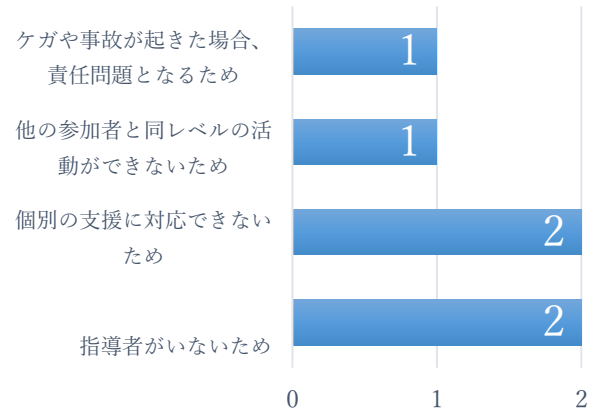
- ・障害者を対象とするプログラムの用意
- ・スタッフの個別サポート体制の提供 等



問3 受け入れる予定がない理由について

○受け入れへの課題は指導者の確保

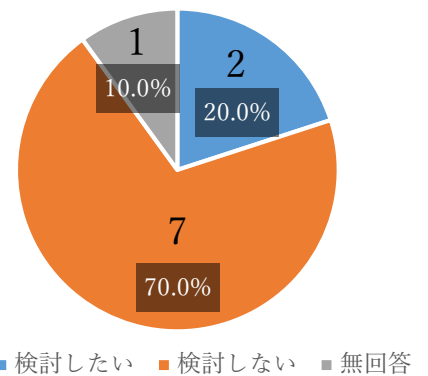
- ・障害者を「今後も受け入れる予定はない」クラブにおける理由については、「個別の支援に対応できないため」「指導者がいないため」が多かった。



問4 障害者も参加可能なスポーツ体験会等の企画について

○障害者も参加可能なスポーツ体験会等の企画に前向きなクラブは少ない

- ・障害者が「現在参加している」「過去に参加していた」「参加していないが受入は可能」である10クラブのうち、パラスポーツコーディネーターが連携し、指導員の派遣やノウハウの伝達等のサポートが受けられる場合、障害者が参加可能なスポーツ体験会の企画について「検討したい」と回答したのは2クラブであった。



⑥成果及び課題

- ▲アンケートの回収率が低く、県内クラブにおける障害者の参加状況等、詳細な実態把握には至らなかったため、関係団体と連携しながらアンケートへの協力体制を整えるとともに、ヒアリング調査も実施する必要がある。
- ▲障害者が参加可能なスポーツ体験会の企画について興味を示したクラブとは、現状の取組や問題点などについて情報交換を行う事ができたが、新型コロナの感染拡大等の影響により、体験会の企画に繋げることが困難であった。

4 事業の評価・成果及び課題

「関係づくり」「人づくり」「拠点づくり」の3観点別に評価項目を設定し、令和6年度までに達成（進捗率を90%以上に）すべき目標値を定めた。目標値に対する令和4年度時点の評価は次の図のとおりである。（令和5年3月5日時点）

観点	評価項目	令和6年度までの累計				R4	R5	R6	令和4年度		
		実績 (R3)	目標値 (R6まで)	実績 (R4)	進捗率 (R4時点)				目標値	達成率	評価
関係づくり	コーディネーターが関係団体等と連携を図り実施した事業の数		80	17	21%	→			27	64%	B
	パラ競技団体等と連携して実施した指導者向け実技研修の回数		10	1	10%	→			3	30%	C
	相談窓口への問合わせ件数		100	20	20%	→			33	60%	B
	関係団体への橋渡しが必要な相談に対し、実施できた割合（各年）		90%	75%	83%				90%	83%	B
人づくり	障害者スポーツ大会、スポーツ交流教室等、パラスポーツ体験イベントへの参加者数	1161	4500	1581	35%	→			1500	105%	A
	派遣した障がい者スポーツ指導員数（延べ人数）	125	500	137	27%	→			167	82%	B
	初級障がい者スポーツ指導員講習会の受講申込者数	8	90	31	34%	→			30	103%	A
	県が主催する事業へのボランティアの参加者数	36	200	54	27%	→			67	81%	B
拠点づくり	モデル指定した特別支援学校でのスポーツ交流教室実施回数		36	6	17%	→			12	50%	C
	モデル指定した特別支援学校でのスポーツ交流教室の参加者数		540	56	10%	→			180	31%	C
	地域スポーツクラブ等と連携したパラスポーツ体験会の実施回数		24	3	13%	→			8	38%	C

評価（目標に対する達成率）
 A… 90%以上
 B… 60%以上
 C… 30%以上
 D… 30%未満

(1) 成果について

本事業の今年度の成果としては、次の点が挙げられる。

①関係づくり

- ・事業の推進母体としてパラスポーツ推進プロジェクト実行委員会を設置し、これまで関わりがなかったステークホルダーとの連携体制を構築することができた。
- ・スポーツ交流教室など、コーディネーターがメイン担当として実施した事業において、関係団体と連携して実施することで体験内容の充実と参加者の増加を図ることができ、多くの県民に障害やパラスポーツへの理解を深めることができた。
- ・相談窓口の設置により、相談者にパラスポーツの機会を提供するためのサポートを適切に行う事ができた。また、相談をきっかけに開催した体験会や、指導者の派遣等を通じ、これまで関わりがなかった団体や指導者の関係が強化され、新たなパラスポーツの体験会が開催されるなど、副次的効果があった。

②人づくり

- ・コーディネーターを通じ、パラアスリート講演会や、パラスポーツやってみるじゃんフェスティバルの周知を図った結果、イベントに多くの県民が参加し、多様な主体がパラスポーツに参画できる新たな機会の創出に繋がった。

- ・パラスポーツに参画する機会の充実により、障がい者スポーツ指導員及びボランティアの各事業への派遣数は昨年度に比べて増加した。また、事業に関わった団体へ初級障がい者スポーツ指導員養成講習会の受講を呼びかけたところ、昨年度の3倍を超える31人の受講者が集まり、パラスポーツを「支える」指導者の人的資源の確保に繋がった。

③拠点づくり

- ・身近な地域におけるパラスポーツの拠点として県内4圏域毎に指定したモデル校を中心に、関係団体と連携してスポーツ交流教室を実施することで、地域における新たなパラスポーツ活動の機会創出を図ることができた。

(2) 課題について

本事業の今年度の課題としては、次の点が挙げられる。

①関係づくり

- ・各市町村の障害者スポーツ担当部署、地域スポーツクラブ、医療・リハビリ等との連携体制構築が未整備であり、協働による事業があまり展開できなかった。

②人づくり

- ・スポーツ交流教室の参加者が思うように集まらずに開催を中止したケースがあった等、1回あたりの参加者数を増やし、様々な主体が集まってパラスポーツ体験をしてもらうための効果的な周知には課題が残った。

③拠点づくり

- ・4圏域の特別支援学校との連携については、それぞれモデル校を指定し、スポーツ交流教室事業実施について理解を得ることができたが、コロナ禍により地域の関係団体へ参加者を積極的に募集することができず、定期的な実施へ繋げるには至らなかった。
- ・地域スポーツ（総合型地域スポーツクラブ等）と協働でパラスポーツ体験会を実施し、日常的な活動場所の創出へ繋げるためのモデル事例を十分に収集することができなかった。

5 来年度の事業方針

今年度はコーディネーターを中核とした「関係づくり」「人づくり」「拠点づくり」の取組により、連携体制の構築や、パラスポーツへの参加機会創出など、複数の事業効果を得ることができた。このことを一過性の効果に終わらせることなく、誰もが身近な場所でスポーツに参加可能な社会を形成するため、パラスポーツ推進プロジェクトの継続と、更なる推進に向けた取組を展開していくことが必要である。

「関係づくり」では、まだ連携が十分ではないステークホルダーの整理及び連携に向けた働きかけを行うことや、アフターコロナを見据えた相談窓口の効果的な運営方法について検討・実践する。

「人づくり」では、参加者の満足度が高かったパラアスリート講演会やパラスポーツやってみるじゃんフェスティバルについて、障害に対する理解向上と、共生社会の実現に寄与するイベントへと持続的な発展を図っていく。また、スポーツ交流教室の実施にあたっては関係団体と連携した効果的な周知により、1回あたりの参加者数増加を図り、様々な主体が集まってパラスポーツ体験をしてもらうための機会を多く創出する。

目標に対する達成率が低水準であった「拠点づくり」を推進するため、モデル校や地域スポーツクラブを中心とした、パラスポーツ体験機会の「量」的充実を図っていくことが特に重要である。

「拠点づくり」の重点的な取組としては、次の点が考えられる。

①モデル校及び、関係する行政機関との連携

- ・モデル校でのスポーツ交流教室実施について、地域の障害福祉サービス事業所や学校等に効果的な周知ができるよう、関係する行政機関との連携により参加者の増加を図る。
- ・スポーツ交流教室の実施にあたっては県内のパラスポーツ競技団体等、複数の関係団体と連携して実施できるよう、コーディネーターが橋渡しを行う。
- ・令和6年度までを目標に、障害の有無にかかわらず、地域の居場所として、モデル校を中心にスポーツによる交流が行われる姿を目指す。

②地域スポーツ（総合型地域スポーツクラブ等）との連携

- ・各クラブに障害者の受け入れ状況の実態調査を行い、受け入れているクラブにコーディネーターを通じてヒアリングを実施する。
- ・ヒアリング実施後、モデルクラブを設定する。
- ・モデルクラブを対象にした実技研修会の実施について検討し、障害者向けの運動プログラムを提供する。実技研修会の実施にあたっては県内のパラスポーツ競技団体と連携して実施できるよう、コーディネーターが橋渡しを行う。
- ・コーディネーター主導によりモデルクラブでのパラスポーツ体験会・交流会を開催し、クラブ指導者や会員にパラスポーツの魅力を伝える。
- ・クラブとの連携により、障害者が参加可能なスポーツ体験会等を開催することで、

モデル事例を創出し、複数のクラブにおけるノウハウの蓄積及び共有が図れるよう事業を展開する。

- ・令和6年度までを目標に、県内4圏域において障害のある方ない方が共に参加する体験会・交流会の開催を目指す。

来年度の事業の全体像としては、次に示すとおりである。

目指す姿（関係づくり）（人づくり）（拠点づくり）により、誰もが身近な場所でスポーツに参加可能な社会
→地域でスポーツに親しめる機会を創出するためのプロジェクトを**継続する**

関係づくり 【事業の継続・発展】

- 関係団体との連携を中核的に担うコーディネーターの配置
 - ・県障害者福祉協会へパラスポーツコーディネーターを配置
- スポーツ団体、福祉、教育、企業等が行っている障害者スポーツ事業の情報把握、連携体制の構築
 - ・パラスポーツ推進プロジェクト実行委員会の開催
 - R5→連携が十分ではないステークホルダーの整理及び連携体制の強化を図る**
- 各種相談に対応するための窓口設置
 - ・障害者本人や支援者、スポーツ団体等からの相談に対応する窓口を設置し、相談内容に応じてスポーツクラブ、競技団体への受け入れ調整や、初回参加時の同行など、障害者のスポーツ活動が円滑に行われるようコーディネートする
 - R5→複数のステークホルダーとのネットワーク構築により、相談窓口の活用について効果的な周知を行い、相談件数の増加を図る**

人づくり 【事業の継続・発展】

- 障害者スポーツの普及啓発を目的とした研修会及びフェスティバルの開催
 - ・パラアスリートや学識経験者による講演会等の企画・運営
 - ・障害の有無に関わらず、誰もが参加できるパラスポーツフェスティバルの開催
 - R5→各イベントの持続的発展を図り、参加者数の増加により、パラスポーツを「する」「見る」「支える」人を更に増やしていく**

拠点づくり 【モデル校や地域スポーツクラブを中心とした、パラスポーツ体験機会の「量」的充実】

- プロジェクトの実践研究、実施事例（モデル）の収集
 - ・4圏域のスポーツクラブ等の関係団体と連携に向けた調整、実践
 - R5→モデル校及び、関係する行政機関との連携により、スポーツ交流教室の参加者数増加を図る**
 - ・特別支援学校施設を活用したスポーツ交流教室の開催
 - R5→モデルクラブを設定し、パラスポーツ体験会実施により障害者向けの運動プログラムを提供する**